

人権教育に関する特色ある実践事例

| | |
|-------|------------------------------|
| 基準の観点 | 協力的・参加的・体験的な学習を効果的に進めている実践事例 |
|-------|------------------------------|

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

滋賀県蒲生郡竜王町

○学校名

竜王町立竜王西小学校

○学校のURL

<http://www.rmc.ne.jp/ryuo-nishi/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】 11学級、【特別支援学級】 2学級、【合計】 13学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】 287人（平成27年11月10日現在）
（内 訳：1年生55人、2年生62人、3年生40人、4年生49人、
5年生33人、6年生48人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成25年度文部科学省委託滋賀県人権教育研究指定校事業
平成26年度文部科学省委託滋賀県人権教育研究指定校事業

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

豊かな感性と自ら学ぶ意欲を持ち共にやり抜く実践力のある子ども
～みんなと生き生きがんばる竜西っ子～
『 学び…きらきら 心…うきうき 行い…どんどん 』

【人権教育に関する目標】

- * 人権を尊重する人間を育てること
- * 本来持っている個人の能力を発揮し、自己実現を図ること
- * 人と人との豊かにつながり、共に生きること

○人権教育に係る取組一口メモ

人権を大切にする豊かな人間関係づくりと、確かな学力を育む人権教育の推進

○人権教育にかかる取組の全体概要

- ・ 特別活動の充実による人権意識の高揚と豊かな人間関係づくりに関する研究
学級集団づくりや縦割り活動を通して、仲間で力を合わせ、学級が一つにまとまった一体感や達成感を味わう体験を意図的に仕組む。そして、一人一人のよさや個性など互いを受け入れる仲間づくりに取り組み、差別やいじめを許さない集団づくりとその手法について研究する。
- ・ 「伝え合い、学び合う力」を高める学習方法の工夫と授業改善に関する研究

話したい、聞きたい、書きたいという思いをためこみ、豊かな表現に力点をおくとともに、相手の思いや考えを受け止め、更に高め合う授業づくりについて研究する。

- ・ 「人権を確かめ合う日」の取組の充実に関する研究

竜王町が毎月11日に行う「人権を確かめ合う日」に連動させた「きらきらうきうきどんどんの日」の充実に向け、実践を残し児童の振り返りを大切にしたい研究をする。

- ・ 児童発信の「いじめを許さない」取組を人権週間・人権集会に連動させる研究
児童発信の取組をすることで、一人一人が自分の身近な問題として「いじめ」について真剣に考える取組を展開できるよう研究する。

3. 特色ある実践事例の内容

本校の児童は、自ら考え、判断し、行動する力においてまだまだ弱い面があり、自分の持っている力が十分に発揮できていない子供が多い。そのため、体験的な学びを大切にし、友達と協力して活動する中で、子供一人一人の自尊感情を高めるとともに人権意識を高め、差別やいじめを許さない人権尊重の実践的な態度を育成することを目指した。

(取組のねらい)

- ・ 仲間と力を合わせ、学級が一つにまとまった一体感や達成感を味わう体験をさせる。
- ・ 一人一人のよさや個性など互いを受け入れる仲間づくりをする。
- ・ 学級満足度や学校生活への意欲、ソーシャルスキルの尺度から、それぞれの児童や学習課題を把握し具体的な手だて（支援）を考える。

(取組を始めたきっかけ)

人との関わりが希薄になっている昨今、相手の気持ちを感じよう、受け止めようとする心や、人とのよい関わり方を身に付けさせるために、一体感や達成感を味わう体験を意図的に仕組み、個性を受け入れる仲間づくりの取組を進めることとした。



(取組の内容)

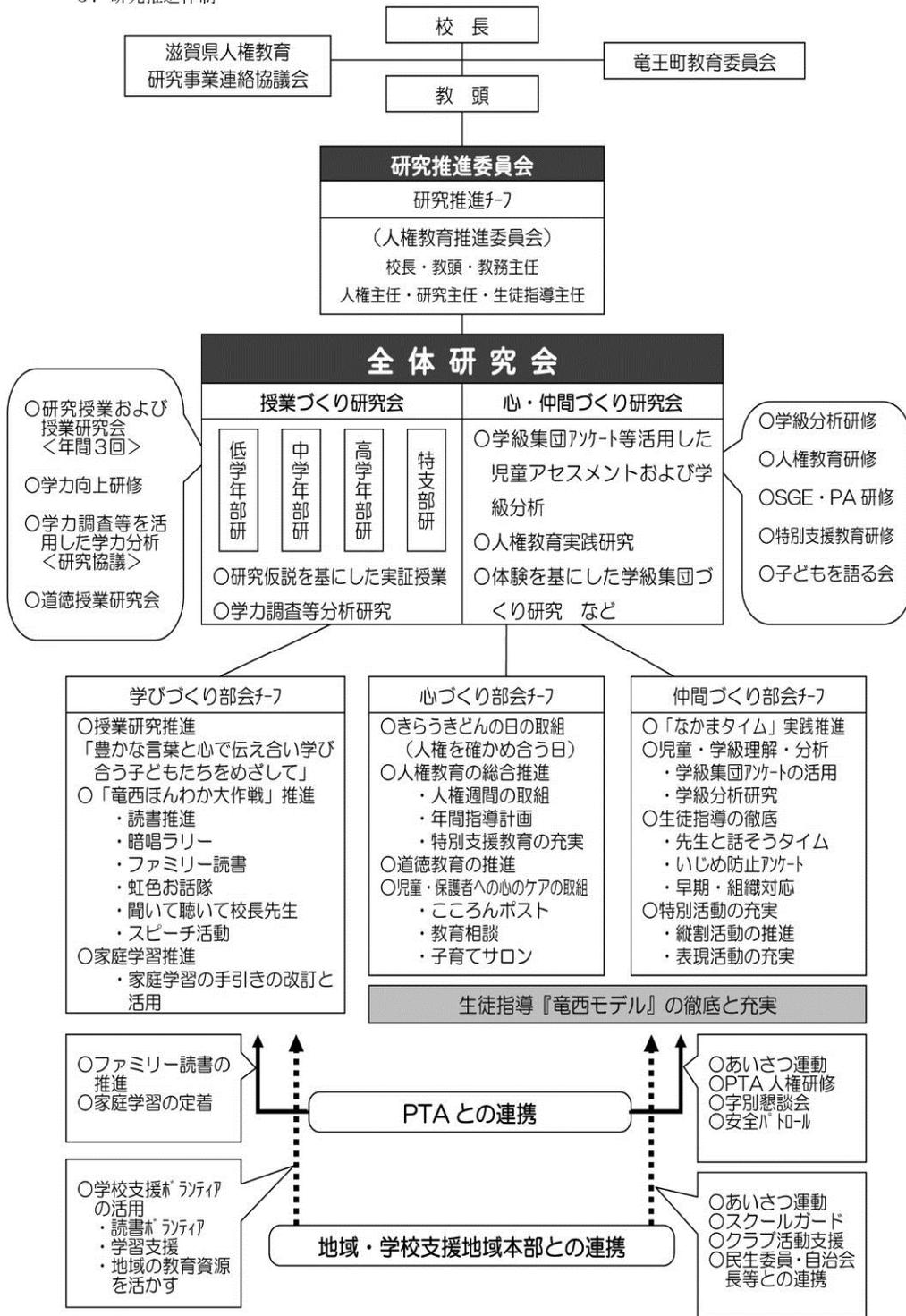
年間を通して計画的に構成的グループエンカウンター（SGE）やプロジェクトアドベンチャー（PA）の手法を活用することにより、仲間と力を合わせ、学級が一つにまとまった一体感や達成感を味わう体験を意図的に仕組んできた。一人一人のよさや個性など互いを受け入れる仲間づくりに取り組み、自己肯定感と自己有用感を高め、差別やいじめを許さない集団づくりや豊かな人間関係づくりに向けた改善を継続的に図ってきた。

また、子供たちの学びや育ち、個々の児童や学級全体の変容を客観的に把握するために、集団に対する学級集団アンケートを2回実施した。学級満足度や学校

生活への意欲、ソーシャルスキルの尺度から、それぞれの児童や学習課題を把握し、具体的な手だて（支援）を考えるためである。子供の実態を客観的に捉え、教員で共通認識することで、確かな学力と集団づくりを基盤とした指導・支援体制を整え、そして検証を行った。

(取組の主体や実施体制)

3. 研究推進体制



4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(取組を実施する際に生じた課題)

構成的グループエンカウンター（SGE）やプロジェクトアドベンチャー（PA）は、「体験」→「振り返り」→「価値の一般化」→「次の体験や日常への適用」→「体験」→「振り返り」…という体験学習のスパイラルに基づく教育手法であり、「体験」に入る前にはアイスブレイキング的な集団の基礎作りを行うなど、教師には教科指導や日常行っている学級経営とは異なるスキル、つまり、ファシリテーターとしてのスキルが求められる。

また、構成的グループエンカウンター（SGE）は学校教育の授業枠に取り入れられるよう、45分枠に収まるプログラムで構成され指導案化もされているが、プロジェクトアドベンチャー（PA）は元々アメリカにおける更正プログラムとして開発されたため、時間の制約を受けないプログラムが多く、授業に導入しにくい面がある。この際、学年の発達段階に応じたプログラムの組合せや系統性はもちろん、集団の実情を把握し、それに応じたプログラムやシェアリング、行事と関連づけた実践が求められ、この面においても教師のスキルアップは必要不可欠である。

(課題に対する解決方法)

SGEやPAを年間計画に位置づけていくことは全校的な取組として組織的に実施していく場合に大変重要である。竜王西小学校においては、本事業の中で研究を進めながら様々な体験プログラムを系統的に教材化するとともに、年間計画に組み込むことでカリキュラム化した。この年間計画は学校行事とも関連づけ、集団の実情に応じながらすべての教員が実践できるよう指導案化・教材化した。

また、SGEとPAの学習効果を最大限に得られるよう教員の研修会を計画的に実施し、外部講師を招きファシリテーターとしてのスキルを高めるとともに、アクティビティに対する知識を高めた。特に、教師の発問の仕方により学習効果が大きく左右されるため、「できなかった」というマイナス評価で終わる目標設定ではなく、「前回より〇秒縮まった」など肯定的評価ができるよう目標設定を工夫するなど、授業研究を通して全教職員がSGEやPAに対するスキルを高めた。

なお、プログラムの実施に当たっては、友達の心の変化に気づき感じ合い、その心（思い）を「実際に行動に移す」ことができる学級集団を育てることを学校全体の目標とした。そのための方法として、朝のスピーチや帰りの会で1日の振り返りを大切にするようにし、日々の授業の中でも「振り返りカード」で子供の学びをみとめることや、学校組織くらし部会の「楽しい学校にしようアンケート」、児童会運営委員会の「学校生活アンケート」によって子供たちの声を集め、児童理解に努めるようにした。

学校生活アンケート

年 級 名 前 _____

みなさんは、学校が楽しいですか。遊具が楽しいですか。竜王西小学校の生活が、学校が楽しいと思えるように思っています。みんなが楽しいと思えるような学校にするためにこのアンケートをもとに、アイデアを作りたいと思っていますのでご協力をお願いします。

友だちとすごしてうれしかったときはどんなときですか。

()

友だちとすごして、いやだったことはありますか。ある・ない (どちらかに〇をつけてください) ↓あるのときはどんなときですか

それを解決しましたか
できた・できなかった (どちらかに〇をつけてください)
↓どうやって解決しましたか

()

周りの友だちでこまっている人はいますか、それはどんなことですか、ですか。

()

今までにだれかをいじめたことはありますか? ある・ない (どちらかに〇をつけてください) ↓あるのときはどうしていじめましたか?

()

学校は楽しいですか? どんなときが楽しいですか。

()

いじめに對してどう思いますか?

()

ご協力ありがとうございました
運営委員会

5. 実践事例の実績、実施による効果

(取組が効果を上げた実際の事例)

自分が受け入れられていると実感できる受容的な友達関係や学級が育っていなければ、子供一人一人の自尊感情は高まらず、主体的な学びや集団で共に学ぶことも難しい。このことから、互いの人権を尊重する心や態度を育成するためには、自己肯定感と学級適応感のアセスメントに基づく、子供たちの居場所づくりが大切であることを全教職員で共通理解を図った。

右の図は6年生の学級集団アンケート（自己肯定感と学級適応感）の結果である。

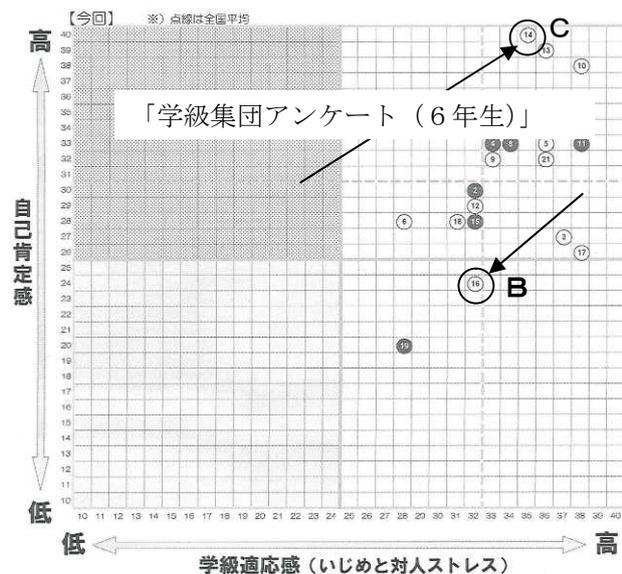
学級の中で一人一人の居場所を作ること、スパイラル的な見方で子供を認めていくことを目標にした。「居場所を作る」ための具体的な取組として、運動会の準備において、一人一人に何かしらの役割を持たせ、その役割を果たさないと運動会が成り立たない状況を作った。子供たちは運動会までの休み時間を全部使って全員が協力して取り組み、大成功に終わった。家族や祖父母から褒めて

もらうことで満足感や達成感が高まり、それに伴う様々な経験が子供たちの自尊感情を一層高めることに繋がったと捉えている。一生懸命がんばることに抵抗を感じる子供が少なくなったこと、男女の関係が格段によくなったこと、教師の指導を素直に受け止められるようになったことなど、運動会の前と後では学級の様子も大きく変容した。

学級集団アンケートから子供たちの状態を個別に分析すると、2学期までクラスの中で前に出ることが少なかった児童Aは、自分に自信が出てきて積極的に前に出られるようになったが、児童Bは明るくなった反面、自己肯定感が下がっている。

児童Cは、外国籍の子で言葉の壁もあり、学校生活の中でなかなか力を発揮する場面がなかった。学習面でも伸び率はすばらしく高いのだが、それでも授業中は理解が困難なことも多くあった。他の友達には簡単に理解できているのに自分ではできないこともあり、学級の中で疎外感を感じていたのかもしれない。

また、女子に対して嫌がる言動をするため、女子に敬遠される面もあったが、運



動会には応援団に立候補し、約3分間の応援発表のために計画・練習し、毎朝下学年に教えに行くという取組をやり遂げた。教えるときには、いつも中心になって誰よりも大きな声で、下学年の声が出るようにがんばった。運動会に向けた取組全般を通して児童Cが周りの友達から受ける評価が変わり、児童C自身の気持ちも変わったことは、学級集団アンケートにおける学級適応感の向上や自己肯定感の向上からも明らかである。

このように、学級集団アンケートを用いて子供たちや学級集団の状態を的確に把握することに加え、子供たちの気持ちをくみ取りながら擬似活動とも言えるSGEやPAを展開していくことで、互いの人権を尊重する心や実践的な態度が育ってきたと考える。

6. 実践事例についての評価

(取組についての評価、及びその理由)

教育実践の前と後に学級集団アンケートを取り入れ、学校生活における児童個々の満足感や学級集団の雰囲気の情報を得ながら指導効果の評価・検討を行うことで、子供たちの自尊感情を効果的に高めることができたと共に、受容的な関係づくりにつながった。

つまり、周りの友達が認めてくれる学級集団が育つことで、主体的に学ぶことや共に学ぶことの楽しさや成就感、信頼感を体感できたと考える。

(現在、実施に当たって課題と感じていること)

人権教育は、幾つものスポット的な取組を実施すれば事足りることは当然ない。それらの取組を核としつつ、日々の学校生活の中でどう活かされ、どこまで実践できているかが最も重要なことである。

子供たち一人一人が違いを認め合い、自分の思いを語り合える集団に高めていくことで、子供たちの人間関係を好ましい方向へと導き、いじめや差別を許さず他者の人権を大切にできる子供たちに育てていきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

竜王町立竜王西小学校

本事例は、協力的・参加的・体験的な学習を効果的に進めている実践事例である。具体的には、特別活動の充実によって人権教育の高揚と豊かな人間関係づくりを目指している。また、「いじめ」について真剣に考える活動を人権教育と関連させ、人権教育の充実による「いじめ」対策が展開されている。協力的・参加的・体験的な人権教育の方法としては、構成的グループエンカウンターやプロジェクトアドベンチャーなどが使用されている。特別活動を活用して協力的・参加的・体験的な指導方法を生かした人権教育の推進を図っていること、教科以外の授業時間を有効に活用して児童が力を合わせて体験活動を行うことにより一体感や達成感を味わう体験の手法など、「第三次とりまとめ」の体験を取り入れた指導方法の工夫を踏まえており、他の地域・学校にとっても参考になる事例である。